

行き場のない石碑

沖縄県立球陽高等学校 三年 嘉納英佑

今年もシーミーの季節がやってきた

小雨の降る中、親戚が集まる

花を飾り、線香をあげ、

ごちそうを並べ

そっと手を合わせる

それぞれの近況報告をしながら

故人をなつかしむ

毎近の光景だが

祖父や祖父の兄弟たちも

髪には白髪がふえ

顔のしわもふえてきた

杖をつき、ゆっくりゆっくり歩く

年を重ねてきたことを感じる

私の祖父は父と兄を戦争で失った

島尻で亡くなっただろうと

いわれているが、さだかでない

だから、このお墓に

祖父の父の遺骨はない

私は幼い頃、

祖父に連れられ、あるガマに入った

祖父の父がいただろうといわれるガマだ

木が生いしげり、岩がごつごつし、薄暗い

私の手をひき、祖父はガマの中へ進んだ

「どんな思いをし、

ここで過ごしていたんだろうね

こんな暗いところで・・・」

ときびしい声でくやしそうに

祖父がつぶやいた

ガマの近くに

祖父の父の名前を刻んだ石碑があり

慰霊の日が近づくと

親戚が集まり、手を合わせていた

祖父や祖父の兄弟たちは

当時の戦争の恐ろしさを語る

尊い命が奪われる戦争はあってはいかん

何度も何度も子や孫たちという

そして今ある生活に

深く感謝し

静かに手を合わせた

しかし数年前、ガマ周辺の整備が進み

石碑が撤去された

祖父と祖父の父を繋ぐ場所が

奪われたような気がした

今、ガマがあるのか

どうなるのかさえ知らない

行き場のない祖父の父の名が

刻まれた石碑が墓の側に並ぶ

石碑を静かに見つめる祖父は

何を思い、何を考えているのだろう

年老いた祖父の目はさびしそう

あんな大きかった祖父が小さく見える

でも、私は忘れない

祖父が語ってくれた恐ろしい戦争の話を

こわくてだっこされながら聞いたこと

尊い命が奪われた薄暗いガマ

祖父に手をひかれながら入ったこと

どんなに苦しくても

どんなに悲しくても

必死で生き抜き

私に命を繋いでくれたこと

今度は祖父の手をひき

私も一緒に伝えたい

戦争の恐ろしさを

平和の尊さを・・・。

私も一緒に考えたい

本当の平和とは何なのか

私にできることを・・・。